

## 第13回日本神経心理学会特別講演，シンポジウム， ミニセミナーについて

笹 沼 澄 子\*

第13回日本神経心理学会のメインテーマを何にするかについては当初複数の候補があがっていたが、最終的に読み書き障害をテーマとする特別講演とシンポジウム I, II, および神経心理学的リハビリテーションをテーマとするミニセミナー三つにしぼられることになった。主な理由は、アンケート調査への反応の中で、これら二つのテーマに対する希望が上位を占めたこと、また本学会の発展を支える学際的アプローチの現状と可能性を展望するうえで、これら二つはいずれも格好のテーマであると思われたこと、などによる。

第1の読み書き障害のテーマは、10年前に本学会の第3回学術総会（豊倉会長）でもシンポジウムとして取り上げられた古くて新しいテーマである。Dr. Patterson の特別講演は、世界の多様な文字表記法の違いを越えた共通の情報処理操作に関する明快な仮説、およびこれを実証する日・英の臨床例および正常者の実験結果を提示したものであり、過去10年間におけるこの領域の研究成果を反映した聞きごたえのある内容であった。

シンポジウム I：読み書きへの学際的アプローチは、①逆転視野順応過程と読み書き行動に関するユニークな実験結果の紹介（御領氏：認知心理学）、②最近注目を集めているニューラルネット（N. N.）の構造とその学習アルゴリズムについての懇切な解説（寛氏：情報科学）、③単語の音読を学習した3層N. N.に“脳損傷”を起こさせて生じた錯読パターンと surface dyslexia の患者のそれとを比較検討した画期的な実験報告（Dr. Patterson）、④猿の図形認識に関する長年の研究成果から、人における読みの神経機構を類推した興味深い論議（岩井氏：神経生理学）と、いずれも示唆に富

んだ内容であった。

一方、読み書き障害の臨床面に焦点を合わせたシンポジウム II では、まず①いわゆる純粋型の失読、失書、失読・失書の病態に関する最近の研究報告の検討（河村氏）と、②純粋例に比して症例数が多く、障害機構も複雑な失語性の失読・失書に対して、系列化機能障害の視点を導入した実験結果の報告（山鳥氏）、次いで③失語症の読み書き障害に対する訓練法の例として、単語の書字過程を構成する三つの機能レベルを仮定して行なわれた書字訓練の方法・成果に関する報告（物井氏）があり、最後に④本学会で従来取りあげられることの少なかった発達性の読み書き障害を、学習障害の立場からとらえた評価・治療教育の紹介（森永氏）で締めくくられた。

二つのシンポジウムは、各演者の個性あふれる充実した講演内容と巧みな司会のおかげで、フロアを交えた総合討論での質疑も極めて活発であり、分野の異なる演者間相互の意見の組み合わせも随所にみられた。無論、今後の研究方向に関する具体的な展望を示し得るところまでは行かなかったが、学際的アプローチに対する会員の関心が高まるきっかけを提供したという意味で、シンポジウムの意義はあったと考えたい。

第2のテーマ、神経心理学的リハビリテーション、が本学会の重要な守備範囲の一部であることは改めて指摘するまでもない。福迫氏（失語症）、鎌倉氏（失行・失認）、鹿島氏（注意障害）による講演内容はいずれも期待通りの充実したものであり、参加者の人気をさらった。今後、一層の発展を期待したい領域である。

最後に、これらの企画に御協力を賜った演者、司会者、そして参加者の皆様に対し心からのお礼を申し上げたい。

\* (財)東京都老人総合研究所, Sumiko Sasanuma: Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology